金のうんこ

——近世ドイツの鉱夫たちに——

吉田孝夫

糞と、格闘する者は、
たとえ、どれほど勝利に近づこうとも、
最後は、自分も臭う。
ローガウ『汚れた勝利』①

1．ドイツは臭う

おお、深遠にして崇高なるドイツよ。そんな巷の固定観念は、例えばベートーヴェンを聴くある種の人びとを、いつしか彼の肖像画と同じなんとも厳しい顔つきにし、「深い」ドイツへの畏敬の念——浅薄なフランスなど問題にもならぬとばかりの——から、恍惚のあまり身悶えなどさせてしまう。しかし、それほどまでに神々しい輝きを放射するらしいドイツの文化は、宗教的なまでの讃仰と理想化を享受する一方で、逆にまた、堅苦しい、ユーモアの余裕をもたない文化だと敬遠されたりもする。滑稽なのは、ドイツの文学や哲学などを研究する外国の、あるいは少なくとも日本の学者までが、やがてそんな「ドイツ風」の厳格な身振りを習得し、他人からえらく尊敬されたり、疎まれたりしていることだ。

社会学的事例としての興味深さはともかく、この状況は、ドイツ文化の適切な理解という点では何かが欠けているという気がする。ドイツ人たちに、あるいはドイツ人たちの文化に、何らかの気高い輝きが感じられるとしても、しかしそれは、この威厳に満ちたドイツ人たち自身がもはや明確には意識していない、一つのきわめて卑俗な、下品な地平に由来するものであった可能性があるからだ。

具体的に言ってしまえば、それはうんこ、つまり大便の地平である。食物の消化過程における最終段階の不要物として、体外へと排泄される、この臭気を発して忌み嫌われるもの。事物の存在価値を示す一つの階梯があるとすれば、いわばその最下層に位置するであろうこの物体が、ドイツ文化の思考法のなかでは極めて重要な役割を担っている。しかもそれは、近世ドイツ、つまり十六世紀初頭の宗教改革あたりに始まる変革期からとりわけ顕著になるのだった。中世という、ラテン語運用能力をステータスとする一握りのエリートによって文化の在り方が大きく規定された時代が終わり、グーテンベルクの活版印刷術による広範なメディア革命を通じて、数多くの一般大衆にも、民衆語つまりドイツ語による自己表現が開かれていく時代、一枚刷りビラや宗教改革の論争パンフレットなどは、名にしおうドイツのグロビアニズム、つまり文化的、文明的洗練とは無縁な、下品かつ粗暴な表現性の大舞台となるのである。有名な『ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら』、あの中世後期から近世にかけてのドイツに流布した民衆本は、素朴かつ率直な筆致をもつ挿絵とともに、糞便描写の百花繚乱の様相を呈している。[2] この道化的知恵者は、糞と戯れながら世俗世界の真相を暴露していくのである。

宗教改革の発端に立つルターには、ドイツならではのそうした表現性を模範的に示す言動が無数に記録されている。例えば、悪魔に向けて彼が口ばしったとされる、次のような言葉がある。悪魔が最も恐れると言われる、肛門にまつわる罵り言葉である。

覚えておくがよい。パンツのなかに私は糞をたれ、お前はそれを首にかけて口を拭くのだ。[3]

「ヴィッテンベルクで屁をこけば、ローマまで臭いがとどくだろう」と言ったともいうルター。しかしそれは、当時には一般的な表現性であり、ドイツに限定された現象ではない、という見方もできなくはないだろう。たしかに、例えば同じ近世の時代、ドイツの西隣にある文化的洗練の筆頭国には、フランソワ・ラブレーというまさに糞尿表現の大家がいた。ただし注目してみたいのは、糞便・屎尿との密接な関わりというものをフランス文化全体のテーマとして扱うことは、この後ますます困難になっていくように見えるのに対し、ドイツでは、この身体からの最終廃棄物との関わりが、少なくとも資料上では近世に端を発して、その後、近・現代にまで長く継続されていくことである。

特に、ドイツのいわゆる芸術的高尚文学に多大な肥やしを与えている民衆層の文化を考える場合、糞便にまつわる表現性はまさに中核的な意味を担っている。近世末期のドイツを生きたリーゼロッテ・フォン・デア・プファルツ、太陽王ルイ十四世の弟と結婚し、栄華を誇るパリにおいて当時の文化的洗練の粋を味わったあの貴族人女性にしてさえも、ついに自らの田舎者的な血筋を忘れることはできなかった。近世の貴重な文化史的資料として知られる、ドイツの故郷に宛てた彼女の書簡には、「フン」にまつわる言葉で埋め尽くされたものがある。そのほんの一部を引用すると——

> 御自分が望む時に、フンしに行かれるなんて、あなたの状況はお幸せです。だって思う様フンをすることができるのですもの。私達はここではそのような状況にありません。ここで私はウンチを夕方まで持ちこたえなければならないんです。[4]

とはいえ、ドイツ文化と糞便の奥深い関係をめぐる洞察自体は、すでに一人の研究者によって提出済みの事柄でもある。アメリカの民俗学者で、もとはドイツ系ユダヤ人であるアラン・ダンデスが、一九八四年の著書のなかでフォークロアからの実に豊富な証例をもとに提示しているのである。ドイツ人は、肛門域と、そこから排泄される物質とに対して異常に強い関心をもっており、「肛門執着（anality）という点でドイツ文化と肩を並べうる他文化がそうざらにあるとは私にはとうてい信じられません[5]」、と彼は言う。そしてドイツ語のなかで最も頻繁に使われる単語とは、まさに「糞」（Scheiße）なのであるとも[6]。

ダンデス自身も言及しているように、ドイツ人の性格特徴としては、勤勉、清潔、倹約、秩序、規則の遵守といった要素を挙げることもできよう。それは他でもないカントが、一七九八年の著作『実用的見地における人間学』のなかでドイツ人の性格として述べた、むしろ一般のドイツ人像としては納得しやすいイメージの系列である。しかしカント的ドイツ人と糞便的ドイツ人とは、何ら矛盾するものではない。ダンデスの論述に従えば、ドイツ人は、乳児期に手足を布で巻ぐるみにされて——ただしこれはドイツだけに見られる習慣ではないが——糞尿にさらされつづけること、続いて幼少期には、早くから非常に厳しいトイレ訓練を強いられることが慣習化となっている。その過酷な幼少体験に対する一種の反動形成として、フロイト的な意味

での肛門性欲的性格がドイツ人の国民性として定着し、極端な清潔主義と糞便愛好とを両立させる結果になったと言うのである。ならば、ドイツ人が早くより厳格なトイレ訓練を行うようになったのは、なぜなのか、そんな卵と鶏の後先を問うような疑問も生じなくはないのだが、やはりダンデス自身もそのあたりの危うさを自覚して、ドイツの国民性とトイレ訓練との関連を一つの「仮説[7]」と言うにとどめている。ちなみに、ユダヤ人である彼がこの著書のなかで言おうとしたことの核心は、そうしたドイツ人ならではの偏執狂的潔癖さに基づいてこそ、あのナチス・ドイツによるユダヤ人虐殺が行われえたのだという、きわめて悲痛な訴えであった[8]。

ダンデスによれば、美味この上ないドイツのソーセージも、あるいはドイツ人による卓越した収集・分類能力の結実である辞書・事典類の編纂も、すべてこの便秘気味のドイツ人における肛門とそこからの放出物に関連してくるらしいのだが、その主張の詳細については彼の著書に委ねることにしよう。ともかくも彼が指摘する、ドイツ文化における「清潔な外形と不浄の内部[9]」、「『清浄と不浄』という二重イメージの同時生起[10]」、という指摘は、非常に重要なものをはらんでいると思われる。ドイツ文化の荘厳にして天上的な世界には、必ずや影のように、鼻をつまみたくなる醜悪なものが、つまりは糞が、まとわりついている。そしてそれは、あたかも天上的にして崇高なものの母体でさえあるかのようなのだ。

はたしてゲーテという、あの気高きドイツ的教養の権化として崇拝される人物は、同時にまた彼の初期の代表作『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』（一七七一年）のなかで、ドイツ語で最悪のものとされる次のような罵り言葉を、主人公に、しかも実に効果的な形で叫ばせる術を心得てもいたのである。

俺のケツをなめてみろ（er kann mich im Arschlecken）[11]

ゲーテは、近世伝統を色濃く残すフランクフルト・アム・マインに生を享けた。十八世紀末以降の近代ドイツ文学がもつ、ある意味ではまさに崇高な、神々しい在り方に対して、それを育む一種の揺籃となったはずの、近世ドイツにおける卑俗な表現性と思考形式を、ある一つの近世的トポスのもとに確認しておくこと、それがこの小論の目的である。

2. 金貨の糞

ダンデスが重視するフロイトの論文『性格と肛門愛』（一九〇八年）には、「金貨の糞をたれる男」（Dukatenscheißer）の像のことが言及されている。[12] フロイトによれば、この像が示すように、金銭に対する関心と糞便とのあいだには深い関係があり、古代文化、神話、童話、迷信、あるいは無意識的な思考や夢、神経症などのなかにその豊富な実例が見出される。例えば古代バビロニアの教義において、黄金とは「地獄の糞」を意味したという風に。[13]

もちろんフロイトは、この論文をドイツ人論として書いているのではなく、あくまでも精神分析学一般の立場から、いくつかの性格特徴を肛門部位への愛着へと関連づけ、一連の「肛門性格」として見定めることを目的としているわけである。しかしダンデスも言っていることだが、[14] フロイトは人間の精神構造そのものを問題にしつつ、しかしドイツ人やオーストリア人のデータに依拠することによって、いつしかこの中欧の人びとの精神構造を論証する結果にもなっている。

そこで「金貨の糞をたれる男」である。別名では、穏当に「金貨の小びと」（Dukatenmännchen）とも呼ばれ、ドイツ、とりわけ近世ドイツにおける糞便観を如実に物語る証人となっているこの像は、ドイツ中央部、ハルツ地方の中都市ゴスラーに存在する。町の中心に位置するマルクト広場に面して、「カイザーヴォルト」館という赤茶色の壮麗な建物が立っており、その正面左側の角、ヴォルト通り沿いの高みに、この男のかなり小ぶりな姿が見られる。衣服は何も身に着けず、素裸であり、こちらに背を、あるいは尻を向け、股を開いている。胴体に比して、少し大きめにデフォルメされた滑稽な顔。右手で建物につかまり、左手は臀部にさしあてている。広げた両足のあいだには大層な量の大便が、一枚の金貨を上に載せて鎮座している。よ

図1　金貨の糞をたれる男

く見れば、肛門部から、ちょうどもう一枚の金貨が顔を出したところでもある。[15]

現在は「カイザーヴォルト」と呼ばれるこの館は、もとは中世十三世紀以来の歴史をもつギルドの館「ヴォルト」であった。「カイザー」（Kaiser）とは周知のように「皇帝」を意味する。民間の言い伝えによれば、ここに多くの神聖ローマ帝国皇帝たちが投宿したことからその名がいつの日か加えられるようになったと言うが、しかし、「金貨の糞をたれる男」の小さな像を圧倒して、建物正面に林立している八体の皇帝像こそが、「カイザーヴォルト」という名の成立に大きく関与したことは確かである。十九世紀初頭のフランス占領下、ここに拠点を置いてきた中世ギルド組織は解散の憂き目に遭い、建物は競売にかけられた。そこに名乗り出た新しい所有者は、これをホテルとして利用することを決心し、一八二〇年、客寄せのために八体の皇帝像を調達させたのである。一説によれば、それは世俗化、つまり解体のうえ財産を没収されたどこかの修道院から流れてきた品々であったということだが、やがてこれらの皇帝像は市民や旅行客の大きな注目を浴び、建物の名は一八三〇年代頃から「カイザー」の名を冠することになった。二〇〇五年の現在もなお、同名のホテルとして経営されている。

一方、「ヴォルト」（Worth）とは、「川の流れに囲まれた土地」、「増水などの危険のない高まった土地」を意味する。ゴスラー（Goslar）という町の名前の由来になったゴーゼ（Gose）川を交通・交易の手段として発展したこの町は、九二二年に築かれた、神聖ローマ帝国の由緒ある帝国自由都市にしてハンザ都市である。当然のことながら、ここにはかつて数多くのギルド館が存在したが、そのなかで最も古い時代に建てられ、そして火災などによる破壊を逃れて幸運にも現在まで残ったのが、この「ヴォルト」館だった。十一世紀に遡るとされる建物の基礎部分の上に、一四九四年に築かれた建物が現存している。かつての遠隔地商人と衣服職人の商館で、数多くの会議室や宴会場、フランドルの織物を格納する広い空間とその加工作業の場所が置かれた。そして建物正面には、このハンザ同盟の繁栄を謳歌した当時に由来する、いくつもの小さな彫像群が見られる。

その一つが、「金貨の糞をたれる男」である。管見によれば、この像の存在は遅くとも近世十六世紀から確認される。[16] 商業活動の中心であるハンザ都市であるから、そこに貨幣にまつわる像が置かれることはある意味で自然なこと

である。しかしそれが、肛門という場所から、糞便と同類のものとして排泄されていることには、どういう含意を汲みとればいいのだろうか。

まずもって、ある種の否定的な意味がこめられていることは事実であろう。商人の館にしつらえられたこの像は、そもそものところ、借金をなかなか返済しようとしない債務者に対して厳しい罰を警告する意味をもつものであったらしい。[17] 最終廃棄物としての糞まで搾り取るという脅迫であろうか。中世十一世紀頃に始まる、ヨーロッパにおける貨幣経済の本格的浸透は、キリスト教徒であるドイツ人に重い心理的負荷を与えた。宗教的理由から、金銭活動を正当化できない彼らは、一方で、金融業に活路を見出し世俗社会で成功していくユダヤ人たちに対して賤視を始める。ユダヤ人迫害の端緒は、周知のようにここにあるわけだが、これ以後、貨幣経済は徐々に世俗社会を席巻し、近世ドイツをもその支配下に置いていく。

阿部勤也の言葉を借りれば、近世は、貨幣を媒介とする利潤追求社会への一元化の過程、すなわち「一元化された新しいマクロコスモスの成立」[18] という大きな歴史的過程のなかにある。中世における、例えば自然界と村落共同体、あるいは自然界と人体との相関関係に象徴されるような、大世界（マクロコスモス）と小世界（ミクロコスモス）の対応としての世界観、そしてこの両つの世界を媒介した呪術儀式は、貨幣システムという別の新しい大世界への一元化によって存在意義を失っていくのである。そして新しい時代の流れに「うまく対処するだけの儀礼がない」民衆層、つまり当時の人口の大多数を成した農民や都市下層民、手工業者といった民衆層は、取りつく島のない不安のなかに取り残されていく。[19] 十六世紀という、中世から近世への過渡期にその存在が確認されているこの「金貨の糞をたれる男」の像は、その姿をハンザ商業都市の拠点的建築物にさらすことによって、借金取立ての恐怖を想起させると同時に、また貨幣を卑しめるその醜悪な姿によって、貨幣への心理的葛藤に苦しむドイツ人キリスト教徒に、いくばくかの精神的均衡を与えたかもしれない。

しかしこの男の姿には、また別の見方も可能である。どんな形であれ、ともかくも彼は自分で金貨を生み出している。厳しい納税義務に苦しんだ庶民にとっては、ある意味で羨望の的でもありうる、いわば貨幣の自家鋳造工場でもある男。はたして、このゴスラーという町は、近世ドイツの時代的潮流、つまり貨幣経済の浸透という大きな文脈においてだけでなく、その根幹をなす一つの産業によっても

また銘記されるべき都市なのだった。

3．鉱山の町

ゴスラーの歴史は、町の南側の山中にあるランメルスベルク（Rammelsberg）という鉱山との関係なしには語れない。[29] 巷間の伝説によれば、騎士ラム（Ramm）がそれを発見して山の名の由来となった――そしてその妻ゴーゼに因んで川と町に名が与えられた――ということだが、ともかくも史実としては、遅くとも九六八年、つまり神聖ローマ帝国初代皇帝であるオットー大帝（九一二―九七三）の時代に採掘が始まった。銀を中心とする豊富な埋蔵量と経済的発展への期待は、さらに後の皇帝ハインリヒ二世をしてゴスラーに王城を築かせるにいたり、一〇一九年からは再三にわたって帝国会議が開催された。これ以後ゴスラーは中世ドイツ史の一つの主要な舞台でありつづけ、十二世紀においてはシュタウフェン家とヴェルフェン家という二つの名家の争いの焦点ともなる。最後の帝国会議が開催されたのは一二一九年のこと。やがて一二五〇年にフリードリヒ二世が没して、大空位時代を迎えるまでのあいだ、皇帝との深い関係にある中世ゴスラーの黄金期は続いた。

次の時代には、これまでの度重なる王侯の訪問で利益を得てきた市民層が主役となる。鉱山業とその関連産業によって持続的に発展し、一二六七／六八年頃にハンザ同盟の一員となった。ハンザの主役たる遠隔地商人の建物、すなわち現在の「カイザーヴォルト」が、ゴスラーの最も高貴なギルドと見なされたのは当然である。市民層の自治は強化され、やがて皇帝代官局を買収、一三四〇年には軍隊権を獲得して帝国自由都市となる。この地位は一八〇二年のプロイセンによる占領まで保持された。

ランメルスベルク鉱山は、銀、銅、鉛などの産出によってゴスラーを支えつづけた。この山を我が物にしようとした近隣の領邦君主ブラウンシュヴァイク公との戦闘に破れ――宗教改革の騒乱のなかでルター側についたゴスラーは、皇帝カール五世による帝国都市としての保護を失っていた――、一五五二年の条約以降、鉱山の利益がゴスラーの財布に入らなくなるという事件はあったが、しかしその後も住民の生活の糧はこの鉱山であった。人びとは山に働きに出て稼ぎを得、さらにこのゴスラー一帯に広がるハルツ地方の各鉱山都市の仲介者として活躍した。また粉挽業、ビール醸造業、屋根用スレートや礬類の産出といった別種の産業を興すことによって、都市の衰退を食い止めた。現在の町並みは、一五五二年以後のこの危機の時代に形成さ

れたものであり、町中に残るドイツ風の木組みの家が、地元産のスレートの黒味を帯びた色に包まれて、独特の趣を成している。

近世ドイツの歴史は、鉱山業と実に深い関係にある。そして鉱山業は、言うまでもなく貨幣経済と切っても切れない関係にある。近世の開始を告げる宗教改革は贖宥状の販売を契機としていたが、それは――もちろん前世紀から類似の腐敗に対するカトリック内部での批判はあったとはいえ――、一つの露骨にして決定的な形での、精神ないし信仰の問題への貨幣制度の侵入を意味するのだった。贖宥状の販売には、南独アウクスブルクのフッガー家という鉱山業の一大組織が大きく絡んでいたことは周知のとおりである。そもそもマクデブルク大司教アルブレヒトが贖宥状の販売権をローマ教皇庁から認められたのは、それ以前に彼がマインツ選帝侯位をどうしても欲しがり、それをローマより授けられるにあたって、多額の献納金を支払ったこと、そしてそのためにフッガー家より大きな借金をしたことに由来している。そこで教皇庁は、贖宥状の販売をアルブレヒトに認めるにあたって、その売上げの半分をローマのサン・ピエトロ大聖堂の建設費に、残り半分はフッガー家への返済に充てるよう取り決めた。どこもかしこも貨幣だったのである。

鉱山業はそのような時代にとってまさに花形の産業だった。貨幣経済の進展に伴って貨幣の需要はいや増しに高まった。また軍事をはじめとする各方面で、金属製品が求められた。かつて中世初期のドイツ鉱山では、未熟な技術のために大規模な採掘を行うことが不可能であったが、十二世紀から十四世紀にかけての技術革新によって一〇メートルを容易に超える深い縦坑が掘られるようになり、一五〇〇年頃、鉱山業は、農業と繊維業に次ぐドイツの中心的産業にのし上がる。ドイツ各地から、銀、銅、錫、鉛などが産出され、特に銀では世界最高の産出高を誇り、また銅の取引ではしばらくのあいだフッガー家の独壇場がつづいた。[21] 近世ドイツは、十六世紀中頃を頂点とする、一大鉱山国だったのである。[22]

この近世ドイツの一つの典型を、帝国東部に位置する当時のザクセン、つまり宗教改革の発端となった国に見ることはあながち間違いではないだろう。ゴスラーを含むハルツ地方は、現在でこそニーダーザクセン州（ゴスラーはここに属する）、ザクセン・アンハルト州、テューリンゲン州という三つの州にまたがってはいるが、近世においては主にザクセン王国の勢力圏内にあったと考えてよい。そし

てこのザクセンから宗教改革が開始されたことは、ここに鉱山業が発展していたことと密接に関連していたのである。

ザクセンには、ハルツ地方だけでなく、国の東端、すなわちボヘミアとの国境にエルツ山地という大鉱山地帯を擁し、そこからもたらされる潤沢な鉱石（主に銀）はザクセンにおけるターラー貨幣の生産を容易にした。貨幣経済は、このザクセンで加速度的に進行し、従来の中世的な現物貢納制から、税金徴収を重視する方向に移行していく。近世ないし初期近代的国家の一つの特徴と見てよかろうが、領邦国家ザクセンの当局は、人口増による税収入の拡大をもくろみ、ここで大きく貢献したのがまたもや鉱山であった。鉱脈が発見されると、そこには人が集まる。アンナベルク、マリーエンベルクなどを一例とする無数の新しい鉱山都市が陸続と誕生する。そしてこの一般市民からの税収入とともに、「鉱山十分の一税」による鉱山業そのものからの税収入が、ザクセンに莫大な金額をもたらした。ブラシュケの一九七〇年の著書に示されているように、この時代に「鉱山業からの最大の利益を得ていたのは、領邦君主制」であり、この近世的ないし初期近代的制度をとるザクセンは、当時のドイツおよび中欧において大きな経済的優位を獲得することになった。[23]

社会・経済・技術史上の詳細についてはこのブラシュケの著書を参照されたいが、この貨幣の国ザクセンに贖宥状の販売者テッツェルがやってきて、「金が箱のなかでチャリンと鳴れば、魂が天国へ飛び出していく」というような言葉を街頭でふれまわったとすれば、[24] それはきわめて象徴的なことだったと言わねばならない。とはいえ、当時の民衆については、彼らが「贖宥状販売に踊らされ、雪崩をうってありがたいお札を買い求めた」[25]という類の簡単な記述が一般になされ、それをもって宗教改革当時の民衆像を描いたとすることには問題が残る。民衆たちは、それほど単純素朴に、ただ無我夢中にそれに飛びついただけだったのか。すでに述べたように、むしろ彼らは、従前の中世的多層的世界観と、新しい一元的貨幣システムとのあいだで、実に複雑、困難な適応を強いられていたのではなかったか。

当時の人口の大多数を成し、多種多様な職業と階層から成る民衆層を、ここで一括して論じることはできない。しかし鉱山という、近世ドイツにおける一つの典型的トポスに生活の拠点を置いていた人びと、つまり鉱夫たちの世界観について一瞥を投じておくことは、近世ドイツ民衆の世界像を理解する上で何らかの意味はあるだろう。ゴスラーの広場では、ランメルスベルクで働く数多くの鉱夫たちも

また、通りすがりに、あの像を見上げていたはずなのだから。

4. 鉱夫の世界

不可思議な頭巾に黒装束。独自の礼拝堂と守護聖人、独自の労働歌をもち、そして門外不出である鉱山の秘密の知識を秘めている。それは多くの場合、いわゆる迷信と呼ばれるものとも深く結びついていたのだが、ともかくも近世の鉱夫たちは、周囲の社会から隔絶され、固有の神秘的世界を形成していた。「彼らの仕事の危険性、発見した金属の高価さ、《普通の》労働との質の違い、限られた地域への集中など」[26]が、鉱夫ならではの自意識を生み出すことになり、周囲からは畏怖とも嫌悪ともつかぬ複雑な感情をもって眺められた。鉱脈の在り処はその発見者の所有する土地となる、という鉱山の自由特権が中世より認められていたほか、兵役や間接税の免除、裁判権、漁労・狩猟権など数々の特権と社会的栄誉を彼らは享受していた。[27]

後の近代炭鉱労働者に見られるプロレタリアート的な姿は、まだここにはない。というよりも、正確にはまさにその萌芽がこの近世鉱山に始まっており、初期近代としての時代性がここに観察されるのである。近世鉱夫とは、「十六世紀の初期資本主義体制化の最初の賃労働者」[28]であった。鉱山の大規模化と機械の導入、そして株式会社方式による資本主義の進行に伴って、彼ら誉れ高き Bergmann（鉱夫）は、その下層から次第に Bergarbeiter（鉱山労働者）へと変質させられていく。

近世の鉱夫は、貨幣経済の進展と技術革新を続けるこうした近代化への方向と、逆に、それに抗って残存しつづける近世ないし中世的な世界観との拮抗のなかに生きている。他の職種にはおよそ見られない、伝統性と近代性の深く混在する空間。つまり近世には、知識人層だけでなく、民衆層のなかにもまた、この複雑困難な状況を生きなければならない人びとがいたのである。近世の鉱夫としてまず思い浮かべるべきは、やはりルターの父であろうか。ルターはよく自分自身を「農民の子」と称しており、それは実際に間違いではないのだが、ルターの父ハンスは、ザクセンの一離農鉱夫として、近世という鉱山業の時代の一つの典型的存在だった。やがて彼は一種の資本家となり、鉱山の管理職階級にまで登りつめていく。そして同時に、鉱夫の迷信的世界にあくまでも自分の根を置く人物でもあった。

その子ルターに対して、父は聖職者になることなど望んではいなかった。実学としての法律学を学ぶことになった

のはそのためであるが、やがてルターは、落雷体験を経てアウグスチヌス隠修士会の修道院の門をたたく。父との葛藤をめぐる「若きルター」に関しての歴史心理学的分析はエリクソンの著書に譲るほかないが、この息子ルターもまた、父と同じく鉱夫的な二律背反を生きた人物、すなわち一方では人文主義の洗礼を受けた、新しい時代の明晰な頭脳の持ち主であると同時に、先の引用に見られたような下卑た言葉を好んで吐き、悪魔の迷信を捨てようとはしない頑迷な男だった。

鉱山都市そのものもまた、この矛盾を生きていたように見える。ブラシュケの著書には、新参者の集合体としての鉱山都市の精神的開放性と進取の傾向が説かれ、フライベルク、アンナベルクを一例とする各都市で実践された最新の人文主義的教育の成果と、宗教改革時における鉱夫の指導的役割が強調されている。[29] 近世鉱山学の百科全書的書物『デ・レ・メタリカ』（一五五六年）を著し、鉱山・冶金業の発展に大きく寄与したゲオルギウス・アグリコラは、ザクセン人の優れた人文主義者であった。彼のこの著作を読むと、鉱山の迷信を批判し、鉱山の有用性を強調する啓蒙的、近代的傾向が主音調であることはたしかに事実である。例えばハシバミや柳の枝で作られ、鉱脈の在り処を知らせると一般に信じられていた占い棒（Wünschelrute）については非常に懐疑的な見方を示し、むしろ鉱脈付近に特徴的に顕れる自然の姿を正確に観察することを求めるのである。[30] しかし、その巻末に付された「地下の生物について」（一五四九年初版）をめぐっては、少々別の見方が必要になる。

というのも、ここでアグリコラは、いわゆる鉱山の迷信からやはり完全には抜け出てはいないことを露呈しているからである。アリストテレスその他の古典作家に依拠しつつ、彼は全世界の地下生物を、「一日の中の一定時間のみ地下にいるもの」、「一定の季節のみ地下にいるもの」、「常に地下にいるもの」の三タイプに分類・列挙してゆく。それぞれ、ビーバー、蛙、モグラといった類が挙げられるわけだが、この第三のタイプ、すなわちモグラの仲間として最後に挙げられる地下の常住的生物が、洞穴に棲む「精霊」である。アグリコラはこれをさらに二つのタイプに分類し、鉱夫に対して危害を加える敵対型と、坑道内で鉱夫たちの作業の真似をして楽しくふざけまわる善良型とを挙げる。前者の例として、アグリコラは鉱山都市アンナベルクの事件に言及している。そこでは「馬のように長く伸びた首と、荒々しい眼をもつ」山の精霊が、「吐息をかけ

て」一挙に一二人の鉱夫を殺害したというが、これはおそらく坑道内の有毒ガスによる事故だったのであろう。

後者の例としては、「山の小びと」（Bergmännchen）とも呼ばれる山の精霊を挙げている。彼らは「翁のごとく年老いて」おり、「指尺（約二〇センチ）三つほどの大きさ」で、「鉱夫たちと同じ、つまり両側をくくり合わせた仕事着と、太腿から垂れ下がる鉱山用尻当て皮を身につけている」。そして「笑い飛ばしたり、罵り言葉で刺激したりしなければ」誰にも危害を加えることのない、朗らかな連中なのだという。

> 山の精霊は、金属の得られる、あるいはその見つかる希望がある坑道で働くのが何よりも好きである。それゆえに鉱夫たちは、山の精霊に出会って恐れ退くことはなく、むしろそれをよい兆候と考えて、陽気な心でさらにいっそう仕事にいそしむ。[31]

一二巻にわたって、鉱山学の膨大な実用的知識を啓蒙的に提示してきた彼が、地下の生物を論じた文章の締めくくりにこのような言葉を記す。精霊信仰というものが、彼ら鉱夫たちが日々さらされている生死を賭けた労働と、それへの不安からきているとすれば、アグリコラは、最新の技術を列挙するなかにも、ついに人間の精神的空隙を無視することはできなかったのである。時代の先端を行く、近代鉱山学の準備者として顕揚されるのが常であるアグリコラだが、近世民衆の生活観を考える場合、彼のなかになお残存するこうした古い地層を見定めておくことも必要である。

鉱夫たちの「迷信」と呼ばれたもの、地の底に生きた鉱夫たちが、地の底の想像力によって生み出したもの、それは膨大な量の鉱夫伝説（Bergmannssage）という形で伝承されている。イナ＝マリア・グレヴェールスとの共同作業のもとにゲルハルト・ハイルフルトが著した大著『中欧ドイツ語圏の伝説伝承における鉱山と鉱夫』（一九六七年）は、近世と近代の資料から、鉱山と鉱夫にまつわる一二〇〇以上の伝説を収集し、それを物語内容の特徴から一二の型に分類している。すなわち「発見と鉱山の設立」、「地下と地上の超自然的現象」、「鉱夫のための精霊による助け」、「警告と予見」、「奇跡的な救助と保護」、「行動規則の違反への罰」、「傲慢不遜とその報い」、「鉱山の没落とその原因」、「不気味な場所と化した廃坑」、「《ヴェネチア人》――神秘的探鉱者にして発見者」、「山と水の富」、そして「人の手の届かぬ、魔法をかけられた地下資源」とい

う具合である。[32] ハイルフルトは、鉱夫伝説のみならず、ドイツの鉱山をめぐる包括的な文化史的研究で知られる。その彼が、こうしたキーワードのもとに展開する鉱夫伝説の根底に見出すのは、地底の闇のなかで、死の危険と生の幸福の極端な緊張に常時さらされているという、鉱夫の独特な状況であった。一方に、いつ起こるとも知れぬ崩落事故の危険性があり、それに並行して、種々の危険を回避するためのあまりにも厳格な坑内の規範があり、そしてまた一方に、鉱脈の発見による莫大な富の希望がある。その精神的負荷のはざまで鉱夫たちは、R・オットーが言う「ヌミノーゼ」、つまり「恐ろしくかつ魅惑的な神秘」を、[33] 日々の労働のなかで味わうのである。無数の鉱夫伝説は、そうした鉱夫の体験性の結晶なのだった。

口承文芸学者リューティは、伝説（Sage）というジャンルの特性を論じた一文のなかで、やはりオットーの概念に言及し、そうした魅惑的であると同時に異質かつ異常なものに遭遇させられる人間存在の「不確かさ」こそが、この伝説という形式における人間像の本質を成しているという。そして昔話（Märchen）との対比から、「昔話においては此岸的なものと彼岸的なものの出会いは自明のことだが、伝説においてはこの出会いが」、つまり「二つの世界の出会い」そのものが「本来のテーマ」なのだと説く。

鉱夫伝説は、その神秘的相貌とは裏腹に、例えば馬力による巻揚機、水力による折返し運転水車、同じく水による砕鉱機、あるいは単純な直接精錬炉から高炉への移行といった、当時最先端の技術[34]が導入された場所、つまり魔術的なものとはもはや無縁な、初期近代の散文的状況において育まれたのだということを忘れずにおきたい。その現実性、リューティの言葉で言えば「此岸性」のただなかに一瞬煌めく光が、神とも魔ともつかぬ坑内の体験だったのである。「伝説は、大地の不透明な奥底に消えてゆく暗い洞窟や、時間と繁茂する自然の不透明性の中に粉々になって消えてゆく廃墟などを好む」[35]と彼が言うとき、鉱夫伝説とは、伝説そのものの一つの典型であると思わざるをえない。

> 伝説は故郷をつくり、昔話は世界を創造する。昔話は広さに導き、精神を広げ明るくする。伝説は深みへと通じている。そこでは、人間の精神と人間の魂が風景の中に織り込まれているのである。[36]

伝説そのものの寓意のように、暗い深みへと降りてゆく鉱夫。彼を養う、他には代えられぬ土地とのあいだに、濃

厚な精神的関係を取り結びながら、鉱石という宝物を探し求めて、鉱夫は地の底を彷徨する。その体験を物語として整えること、そしてそれを互いに物語り、鉱夫の伝説として伝承していくこと、それは、旧伝統と近代性とのあいだに引き裂かれ、不安を余儀なくされた彼ら近世人にとって、時代の矛盾をやり過ごす一つの確かな「儀礼」[37]となったはずである。

ただし問題はまだ残る。地下を掘り進む営みは、恵みを受けとる希望の行為として、いかに美化、理想化されようとも、同時に図らずもまた、その恵みを与えたもう大地を、取り返しのつかない形で傷つけることをも意味しはしなかったのか。

5．うんことは何か

足尾銅山の事件を挙げるまでもなく、鉱山は、環境破壊と無縁ではありえない。ドイツでも、畑地を耕す農民と鉱夫たちのあいだには、鉱毒と土地所有をめぐってしばしば対立が生じてきた。日々、大地を削り取り、傷つけなければならぬ鉱夫たちの精神に沈殿していく良心の呵責は、また様々な鉱夫伝説へと結晶していく。例えば、坑道内の厳格な規範を忠実に守る者だけに、大地の守護神は鉱石の恵みを垂れたまい、それを守らず、金銭への放恣な欲望に駆られた者は、事故に遭って命を失うというふうに。

しかしこうした心のわだかまりは、民衆階層の鉱山関係者のみに見られた事柄ではなかった。十五世紀後半という、ドイツ鉱山業が右肩上がりの発展を遂げる時代に、ドイツ最初の鉱山文学作品が生まれる。パウルス・ニアーウィス（ドイツ名　シュネーフォーゲル、一四五五―一五一五）による『ジュピターの裁き』（Iudicium Iovis、一四九二／一四九五年）というラテン語作品である。ボヘミアのエガーに生まれた彼は、バイエルンのインゴルシュタット、そしてザクセンの中核都市ライプチヒで大学生活を送る。このライプチヒで学位を取得し、ラテン語によるプラトンの著作集を出版した。れっきとした人文主義者である。一四八六年、ザクセンのエルツ山地西部に広がる鉱山業地帯の中心都市ケムニッツ（ちなみにアグリコラはこの町の市長を務め、代表作『デ・レ・メタリカ』は一五五〇年頃にこの町でほぼ完成された）でラテン語学校の設立に関わり、九〇年代末葉には、同じくザクセンの鉱山都市シュネーベルクで、市参事会経営のラテン語学校に奉職している。

近世ドイツの鉱山という問題圏のなかで、彼はアグリコラの陰に隠れてほとんど注目されることがないが、迷信を

極力排して鉱山活動の正当化と効率化を進めようとするアグリコラに先立つことほぼ半世紀、この『ジュピターの裁き』は、まさに自然を破壊する人間の心の煩悶を主題にした、「その文学的な形象化と思考の運びにおいて傑作」[38]と呼ぶべき作品である。筋書きは、神々の頭目であるジュピターの法廷に、母なる大地によって訴えられた子どもたち、つまり鉱夫たちが座らされるというものである。母なる大地は、人間たちがシュネーベルクその他の各地の鉱山を開発することによって、大地という母を破壊、ひいては殺害しているとジュピターに訴える。

殺し屋よ、もしまだその体のなかに、子供らしい感情のわずかなきらめきをもっているのなら、大地をよく見てみるがよい。（中略）おまえのなかには、おまえを産みおとした母への愛情がかけらもない。おまえが引き起こした裂け目を見なさい、この身体から流れ出る血を見なさい、この蒼ざめた顔を見るがよい、おまえはその母に育てられたはずでしょう。（中略）おまえは（中略）母を傷つけ、そしてまさに厭うべきことには、そのはらわたを切り裂こうとしているのですよ。[39]

ところが息子たる人間は、機転をきかせて反論する。様々な術策と暴力をもって大地を傷つけざるをえないのは、まさに母なる大地その人が、貴重な宝物を奥深く隠し持っているからなのだと。そして樹木の伐採も、水質汚染も、土地の不毛化も、鉱山活動による自然破壊はすべて、息子にきちんとした文明・技術の装備を与えていない母自身の責任なのだと言い放つのである。大局的には、この知識人ニアーウィスも、社会的利益のために鉱山活動を正当化するアグリコラと大差ない方向をとっていると見てよいだろう。

しかしながら、この作品を書かせる動機となり、この文学という媒体のなかに露呈された鉱夫たちの良心の呵責は、近世ドイツの人びとを捉える上で看過することはできない。母の科白は、そのまま近世民衆の内心の声でもあろう。彼らは母殺しを行っている。あるいは、母の身体の内部を漁っている。しかもその「はらわた」（Eingeweide）の内部を。

つまり図らずも、鉱夫たちが日々掘り出しているものの真相が明かされる。それは「はらわた」、すなわち大腸の産物なのだと。鉱石を求めて歩く、地底の闇のなかの坑道は、母の大腸であり、彼らが見つける宝物とは、母の大腸

のなかにある何ものかなのだ。

ここでルターに立ち戻ってみよう。エリクソンに従えば、二十代前半まで鉱山で暮らした父ハンスは、その迷信的世界観によって息子マルチン・ルターの幼少期に絶大な影響を与えた。「キラキラ輝くもののすべてが金であるわけではない」という、鉱夫たちにとっては「運命的なことわざ」があるとおり、彼ら親子には、「光り輝く宝に見えたものが、泥やそれ以下のものに姿を変えるという疑いの念」が深く沁みこんでいたという。[40]

しかしその逆もまた真であった。「泥」と「それ以下のもの」、すなわち糞便は、ルターにとって、同時にまた深い生産性の源でもあった。エリクソンは、大地の象徴的意味について論じた節で次のように言う。

> 魔術的で危険な共通の地下では、悪魔と悪魔の住みかが結びつき、排泄物とその元の住みか［大腸］が結びつく（中略）。この共通の地下とは、大地の内部と魂の内部という二つの意味で理解されてよい。前者は大地の奥深くであって、そこでは泥が価値のある金属に変化する可能性があった。（それは一種の魔術的過程と考えられており、地上では錬金術師たちがその過程を実験室で再現しようと奮闘していた。）後者は、元の情熱を神秘的に変容させる最も内面的な自己であり、隠れた「魂の根底（Seelengrund）」である。[41]

糞便とは、このようにすぐれて二義的なものである。エリクソンはさらに、一般に〈塔の体験〉と呼ばれる、ルターの思想形成にとって重大な転機となったあの啓示的瞬間が、ほかでもない便所で生じた可能性を指摘する。「身体にとって『ひとつの末端』である便所」とは、「ルターにとって、ある時は機知に富み、ある時は苦痛に満ち、ある時は妄想的になる場所であった。それはあたかも悪魔と出会うための『汚れた場』であるとともに、神と出会うための純なるものの創造される『魂の根底 Seelengrund』でもあった」。[42] 後年、贖宥状に関わる「汚れた」金属を批判することになる彼は、その同じ精神の坩堝のなかで、いわゆるドイツ的内面性の核心を成す、ルター的な信仰という黄金を見出すにいたる。糞便表現を弄び、二義的な物体であるうんこと、常に戯れつづけながら。糞は神々しく輝いたのである。

ルターにおける、この糞便的精神からの黄金の誕生と、その原動力となった、暗闇のなかに屹立する鉱夫的探索精

神は、後に開花する近代ドイツ文学の一つの重要な相貌を、ここですでに萌芽的に示している。ロマン主義の時代、ノヴァーリス、ティーク、ホフマン、アイヒェンドルフら、数々の詩人たちがこの鉱山のモチーフに魅惑され、彼らの作品にそれを織り込んでいったことはよく知られた事実である。また同時代のゲーテも、一国の宰相としてイルメナウ鉱山の再興に（結局は失敗に終わるけれども）努力し、鉱物学に深い造詣を示しただけでなく、詩『イルメナウ』、小説『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』といった詩作品に鉱山との密接な精神的関わりを表現する。そして代表作『ファウスト』には、第二部第一幕、皇帝の居城における「数々の控えの間を有する広大な広間」のなかで開かれた仮装舞踏会の場面があり、そこにファウヌスやサチュロスといった古典古代の神々と並んで、「土の神グノーム」という小びとの精霊と、あのゴスラーを抱えるハルツ地方出身の「巨人たち」という、ドイツ土着の神々を登場させるのである。

どちらも、近世ドイツの民間伝説に馴染みの登場人物であり、だからこそアグリコラも地下生物を論じた自著のなかでこの「グノーム」たちに言及しなければならなかったのだが、思えばそのアグリコラとは、この作品の主人公のモデルとなったファウストと、まさに同じ近世ドイツの空気を吸っていた男だった。ただし一方は、近代自然科学の一翼を担う新しい鉱山学の創始者として、そしてもう一方は、謎に包まれた太古の知恵を受け継ぐ錬金術師、魔術師として。しかし、その二つの方向性がなお渾然一体として、今ようやく近代性と伝統性が互いに実をもぎ離そうとし始めていたあの瞬間、つまり近世という瞬間においては、二人の姿はなお一つのものでもあっただろう。地下の宝物の魅惑にとりつかれた、一人のドイツ的、鉱夫的人間として。——近代自然科学の揺籃の場所となる錬金術において、「賢者の石」を発見すべき不可欠の担い手とされたのは鉱夫である。[13]

「土の神グノーム」は、ゲーテ『ファウスト』のなかで自己紹介的にこんなことを語る。

座敷童子の親類で、
岩の外科医で、その名も高い。
深い山には刺胳をしたり、
鉱脈からは血を取ったり。
「ご無事、ご無事」と声かけながら、
どんどん掘り出す金（かね）の山。

これも世のため、人のため、
みな善人の味方です。
ところが、あつめた金のため、
盗みをするやつ、女を売るやつ。[14]

「ご無事、ご無事」とは、ドイツ語原文では Glück auf! Glück auf! となる。意味的には「幸運」（Glück）に、事故なく地上に「上がって」（auf）きてください」というほどの、ドイツ鉱夫の伝統的な挨拶言葉である。地下の精霊は、その掛け声をもって互いに励ましあう鉱夫たちを、坑内で手助けすると信じられた存在であるが、この挨拶はまたもう一つの意味合いを持っていることも明らかであろう。つまり「幸運よ、幸福の源である鉱石よ、地上に現われでよ」という願いとしてである。ところが、これだけ探し求めた鉱石は、地上に出るやいなや、貨幣として人間の欲望の焦点となり、盗みや姦淫、殺人の種となることが稀ではない。ゲーテと同時代、ノヴァーリスが『ハインリヒ・フォン・オフターディンゲン』（一八〇二年）のなかで言ったように、「商品となった鉱物など、坑夫には何の魅力も持ちえない[15]」。黄金は、ルターら近世人が信じた鉱夫の諺に言われていたように、地上でうんこと成り変わるのである。また近世の鉱夫伝説には、鉱脈の発見によって富の頂点に達した鉱夫の妻が、慢心を起こして身をもちくずし、最後には「汚物」（misthauffen）のなかで死んでいく話がある[16]。この伝説を記録したのは、ルターとのちかしい師弟関係から有名なルター伝を書き、さらに鉱山都市ヨアヒムスタールの聖職者として鉱夫のための説教集と讃美歌集を編んだヨハネス・マテージウス（一五〇四－一五六五）であった。

しかしドイツ人は、ともかくも下に降りなければ何も始まらないかのようである。ドイツないしゲルマン系の人びとの一特質として、憂鬱質ということが言われるが、エリクソンはその典型としてまたもやルターを挙げる。「あの（人の運命はその努力と無関係に全面的にあらかじめ決められているといった）悲観的な、哲学的にはとうてい支持しがたい概念によって、冷たいどん底の気分や真っ暗な背景についてこと細かに語った」ルター、そしてあの重苦しく長いドイツの冬の闇を生きたルターにとっては、その徹底した下降・沈滞こそが、「春が訪れるための条件でもあった」という[17]。

下に降りてゆくだけでなく、長くその穴蔵に留まり、探求を続けること。坑道／大腸のなかにそれだけ長期滞在す

れば、やがて臭いもひどくなろう（ルターは便秘に苦しんでいた）。ドイツ文化への誉め言葉としてある「深み」とは、この肛門的な深度の意だったのだ。しかも、ドイツ人の糞便との交わりは、ひどく生真面目なものであるらしい。バフチーンは、ラブレーを素材として近世ヨーロッパの民衆文化の在り方を活写したあの著書のなかで、ラブレー的糞便遊戯の「陽気」さを描き出し、「糞は陽気な物質である」と定義する一方で、しかしそれを独訳したフィッシャルトや、ザックス、デデキントら、つまり近世ドイツ人たちのグロビアニズムにこびりつく道徳性と教訓性を指摘している[48]。糞との戯れまでが、ドイツ人は真面目そのものなのだ。もとが、厳しいトイレ教育から来ているドイツの糞便嗜好は、どうしてもそこに同じ厳格さを反映させてしまうのだろうか。

ラブレーにも存在した糞便遊戯ではあれ、ドイツの糞便愛は、こうした鉱夫的なもの、つまり黄金を探し求める生真面目さに裏打ちされた、鉱山の忍耐労働的なものであることが特徴である。しかも鉱夫たちは、一つの山に永住することは稀であり、むしろ、栄枯盛衰の縮図のような鉱山世界を、山から山へと流浪して歩く生活であった（日本の近代炭鉱労働者たちと同じく）。興味深いのは、その彼らが、宗教改革期にルター思想の最初の最も重要な担い手として機能したことである。放浪の途上で、彼ら鉱夫たちはルターの信仰の伝播に貢献した[49]。鉱夫の息子ルターが汚泥の闇のなかから切り出した黄金を、同じ鉱夫が、ドイツの巷に広めて歩いたのである。たとえ、やがて後の時代に、このルター主義が領邦教会制度と官僚主義へ、そしてトーマス・マンが批判したような、ドイツの政治的な保守性と未熟性へ、さらにはナチズムへと展開していく一つの淵源となったとしてもである。黄金は、ドイツ史のなかでやはり「糞」と化すさだめにあった。

ゴスラーの古い建物の壁に今もしがみついている、あの「金貨の糞をたれる男」。近世の時代にそれを見上げた鉱夫たちの心のなかで、肛門／坑道から金貨を自家生産する姿に、いつしかこの像が鉱夫の衣装を身にまとっていくとしたら、そこに彼は深く自分の姿を重ねていったことだろう。しかしそれには常に良心の疚しさがまとわりつく。黄金欲しさに、母なる坑道という神聖にして侵すべからざるものを侵しているのだから。ドイツ語では、あるいはドイツの基層にある思考法では、「金脈」（Goldader）という単語が、同時に「痔で出血する静脈」をも意味する[50]。鉱山労働の穢れの意識は、だからまたあの像を見上げる鉱夫に、

肛門部とそこからの排出物に対する嘔吐とも愛着ともつかぬ複雑な感情をひきおこす。そうした近世ドイツ民衆の精神を反映する、十九世紀初頭のグリム兄弟による『ドイツ伝説集』が、はたして一連の鉱夫伝説から始められ、またそのなかに数多くの鉱夫伝説を含んでいることは、ある意味で非常に象徴的なことと言わねばなるまい。

ちなみに、あの像の男が尻から出していたのは、ドゥカーテンという金貨であった。黄金は、残念ながら貨幣の材料とするほどには、ドイツでは産しない（中世以降のヨーロッパには、マリ王国を中心とするアフリカ大陸から膨大な量の金が流入していたことが知られている）。銀と銅の国ドイツでは、黄金が万一見つかるとしても非常に稀少であり、ほぼ存在しないにひとしいのある。ゴスラーのあの排便像は、その意味でも重要なことを語っているだろう。金貨とは、ただ漠然と価値ある物質としてあの場所に置かれたのではなく、それはまたドイツ人にとって、ついに彼ら自身の領域内には見出しえないもの、己れの内部に探そうとも、そもそも存在しないものだったのだということを。在るのはただ、その存在しえないものへの憧憬だけ――地の底へと降りていく彼ら鉱夫たちの、糞と黄金のはざまをたどる、終わりなき彷徨の過程だけだったのだ。

註

① Friedrich von Logau: Schmutziger Sieg. In: Friedrichs von Logau sämmtliche Sinngedichte. Hg. v. Gustav Eitner. Tübingen 1872. Nachdr. Hildesheim/New York 1974. S. 173. (1. 8. 54).

② 『ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら』（阿部謹也訳）、岩波書店、一九九三年、第一〇、一二、一六、三五、四六、五二、六九、七二、七七、七九、八五、八八、九〇話などを参照。

③ Martin Luther: Tischreden. II. Nr. 1557. (Weimarer Ausgabe)

④ アラン・ダンデス『鳥屋の梯子と人生はそも短くて糞まみれ――ドイツ民衆文化再考』（新井皓士訳）、平凡社、一九八八年、九六頁による。

⑤ 同、二〇八頁。

⑥ 同、三七頁。

⑦ 同、一三七頁

⑧ 同、一七五―二〇三頁。

⑨ 同、一五三頁。

⑩ 同、一五一頁。

⑪ Johann Wolfgang von Goethe: Geschichte Gottfriedens von Berlichingen mit der eisernen Hand. In: Goethes Werke. Jubiläumsausgabe. Bd. 2. Frankfurt am Main/Leipzig 1998. S. 72. ちなみにこの科白は、一七八七年の

『著作集 Schriften』の段階ではダッシュを用いて抹消される。

⑫ ジークムント・フロイト『性格と肛門愛』、同『フロイト著作集』第五巻所収、人文書院、一九八一年、一三七頁。

⑬ その他にも、イタリアの民話『ほいほい、驢馬よ、金貨の糞をしろ！』（カルヴィーノ『イタリア民話集（下）』（河島英昭編訳）、岩波書店、二〇〇四年、七一―八〇頁）は傑作の笑話である。これにはヨーロッパだけでなく日本にも類話が存在する。高木昌史『グリム童話を読む事典』、三交社、二〇〇二年、一四三頁参照。

⑭ ダンデス、同書、一一八頁。

⑮ 図一参照。

⑯ 十七世紀以降という指摘もある（Keith Spalding: An Historical Dictionary of German Figurative Usage. Oxford 1960）が、しかし同じアルプス以北の民衆世界に根をもつフランドルの画家、ヒエロニムス・ボスの『快楽の園』（一五〇〇年頃）には、すでにこのイメージの存在が確認される。Vgl. Heinrich Goertz: Hieronymus Bosch. Reinbek bei Hamburg 2002. S. 79f.

⑰ Harz. HB Bildatlas 263. Ostfildern 2004. S. 53.

⑱ 阿部謹也『ヨーロッパ中世の宇宙観』、講談社、一九九一年、二一〇頁。

⑲ 同、二一一頁。

⑳ ゴスラーの歴史に関する以下の叙述は、Angelika Kroker u.a.: Goslar: ein Führer durch die alte Stadt der Kaiser, Bürger und Bergleute. Wernigerode 1997. S. 4ff. に拠っている。

㉑ Wilhelm Treue: Wirtschaft, Gesellschaft und Technik in Deutschland vom 16. bis zum 18. Jahrhundert. (=Gebhardt, Handb. d. dt. Geschichte Bd. 2) 9., neu bearb. Aufl. München 1981. S. 462.

㉒ ただしその後は、スペインがアメリカ大陸の植民地から輸入する大量の安価な銀に主導権を奪われていく。

㉓ ブラシュケ『ルター時代のザクセン　宗教改革の社会・経済・文化史』（寺尾誠訳）、ヨルダン社、一九八三年、七四頁以下参照。

㉔ ちなみに金銭の支払いによる魂の慰安の提供については、すでに十五世紀後半においてカトリック内部で批判が起こり、後の宗教改革期に流布したこの文句の原型となる諷刺詩が生まれている。P・ブリックレ『ドイツの宗教改革』（田中真造・増本浩子訳）、教文館、一九九一年、六一頁参照。

㉕ 森田安一『ルターの首引き猫』、山川出版社、二〇〇一年、五頁。

㉖ ピーター・バーク『ヨーロッパの民衆文化』（中村賢二郎・谷泰訳）、人文書院、一九八八年、五五頁。

㉗ Helmut Gold: Erkenntnisse unter Tage. Bergbaumotive in der Literatur der Romantik. Opladen 1990. S. 40.

㉘ ブリックレ、同書、二〇三頁。

㉙ ブラシュケ、同書、一八〇頁ならびに二三〇頁。

㉚ Vgl. Georg Agricola : De Re Metalica. Zweites Buch. In : Ders.: Zwölf Bücher vom Berg- und Hüttenwesen. (De Re Metalica). Wiesbaden/Gütersloh 2003. (Nachdruck : Berlin 1928) S. 22-33.

㉛ Ders.: Buch von den Lebewesen unter Tage. In : A.a.O., S. 509-541. Hier S. 541. ちなみに類似の信仰は、日本の炭鉱においても確認されている。上野英信『地の底の笑い話』、岩波書店、二〇〇二年、三八頁以下参照。

㉜ Gerhard Heilfurth unter Mitarbeit von Ina-Maria Greverus : Bergbau und Bergmann in der deutschsprachigen Sagenüberlieferung Mitteleuropas. Band I - Quellen. Marburg 1967. S. 6-9.

㉝ Ders.: Einleitung. In : A.a.O., S. 46.

㉞ ブラシュケ、同書、七六―七七頁。

㉟ リューティ「伝説の内容と語り口」、同『民間伝承と創作文学』所収、法政大学出版局、二〇〇一年、四六頁。

㊱ 同書、四九頁。

㊲ 註⑲参照。

㊳ ブラシュケ、同書、一七九頁。

㊴ Nach : Gold, a.a.O., S. 216.

㊵ エリクソン『若きルター1』（西平直訳）、みすず書房、二〇〇二年、八五―八六頁。

㊶ 同書、九〇―九一頁。

㊷ 同、『若きルター2』（西平直訳）、みすず書房、二〇〇三年、二二二三頁。

㊸ Horst Bredekamp : Die Erde als Lebewesen. In : Kritische Berichte 9 (1981), S. 5-37. Hier S. 18.

㊹ ゲーテ『ファウスト　第二部』（大山定一訳）、『ゲーテ全集』第二巻所収、人文書院、一九六二年、一七七頁。

㊺ ノヴァーリス『ハインリヒ・フォン・オフターディンゲン』（青木誠之ほか訳）、『ノヴァーリス全集』第三巻所収、沖積社、二〇〇一年、一三八頁。

㊻ Heilfurth, a.a.O., S. 314f. (Nr. 131)

㊼ エリクソン、同書、三三八頁。

㊽ ミハイール・バフチーン『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』（川端香男里訳）、せりか書房、一九九七年、六二頁ならびに二六一頁参照。

㊾ Gebhardt, a.a.O., S. 464.

㊿ Deutsches Wörterbuch : Jacob und Wilhelm Grimm. Nachdr. München 1999. Bd. 8. Sp. 710f.

（本学助教授　ドイツ文学）

〈キーワード〉ルター、鉱山、スカトロジー